

令和元年6月12日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03337

研究課題名（和文）「人生の意味」に関する分析実存主義的研究と応用倫理学への実装

研究課題名（英文）Analytical Existential Study of Meaning of Life and its Implementation to Applied Ethics

研究代表者

藏田 伸雄（KURATA, NOBUO）

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：50303714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、近年の「人生の意味」に関する分析哲学的なアプローチについて多角的に検討し、「分析実存主義」の可能性と問題点を明らかにした。特にT.Metzが行った関連する研究の網羅的な分析と、そこからMetz自身が得た結論を批判的に検討することを通じて、この議論で用いられている主観説・客観説の区別の問題があることを再確認し、Metzの議論構成が真理条件を前提としたものであること、「有意義な生」の規定の問題があることを明らかにした。さらにBenatarの反出生主義や「死の形而上学」について検討することによって「分析実存主義」における「人生の意味」「出生」「死」の関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「人生の意味」に関する分析哲学的研究、死の形而上学、反出生主義に関する議論を整理することによって、これらの問題について扱う「分析実存主義」の有効性と、その前提及び方法論の問題点を明らかにした。特に「人生の意味」に関する様々な問題のレベルと位相を明らかにして、「自我」や「規範」、自由意志といった概念との関連を明らかにした。さらに「人生の意味」という概念の生命倫理、特に終末期医療の問題への応用可能性を明らかにした。また関連する研究を行っている国内の中堅・若手の研究者による関連業績を共有し、成果を国外に発信できる体制を整えた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we examined the analytical philosophical approach of recent works treating the problems of "meaning of/in life". We proceeded with meta-analysis of this issue on the works by T. Metz, which is the exhaustive analysis of the relevant books and papers on this topic and we reviewed critically the conclusions he derived from it. Furthermore, by examining the related ideas, such as 'the anti-natalism' of D.Betatar, and 'metaphysics of death', we outlined the structure of "analytical existentialism" and clarified what was asked in the related questions. In particular, we found some difficulties in the distinction between the subjectivism and the objectivism, which is frequently used in this argument, and in the structure of this argument which is based on the truth condition.

研究分野：倫理学、応用倫理学

キーワード：人生の意味 分析実存主義 主観説と客観説 死の形而上学 反出生主義 終末期医療

## 1. 研究開始当初の背景

論理実証主義以降の分析哲学研究者の内部、あるいは哲学史の研究者の内部では、「人生の意味」に関する問いは厳密かつ専門的な哲学・倫理学の研究対象とは見なされないことが多かった。しかし1970年代頃から英語圏の分析哲学の内部でも、「人生の意味」の問題は議論の対象になりうると考えられるようになり、R. Taylor による問題提起と前後して、T.Nagel(1971)、Nozick(1981)、D.Wiggins(1987)、P.Singer (1993)を始めとした多くの文献で論じられるようになってきた。さらにE.D.Klemke 編纂によるアンソロジー(1981)や、J.S.Seachrisらが編纂した *Exploring the Meaning of Life*(2013)には、近年の関連論文が収録されている。さらにS.Wolfe がこれらの学説の調停を試み、議論の土壌ができあがった。そしてこの分野はD.Benatarによって、「分析実存主義」analytic existentialismと命名された。

近年、この分野での研究が進んでいる要因の一つは、T. Metz が関連する膨大な数の文献をサーベイしてその結果を発表し続け、2013年にその成果の集大成として著書“*Meaning in Life*”を出版したことである。Metzはそれらの文献の中で、「超自然主義/自然主義」「(超自然主義における)神中心説/魂中心説」「(自然主義における)主観説/客観説」「ニヒリズム/反ニヒリズム」といった分類によって、「人生の意味」に関する諸学説を整理し、その上で独自の主張を展開している。本研究課題はこのようなMetzによる研究成果と、その主張についての批判的検討を出発点として研究を行った。特に研究分担者の森岡が編集する *Journal of Philosophy of Life* の vol.5, No.3(2015)では、Metzの上掲書についての書評論文特集が組まれ、本研究は研究分担者及び研究協力者がこの特集に書いた論文を手がかりとした。

また「苦と生は非対称であり、生まれてくる子は必ず苦を経験するので、私たちは子をつくらない方がよい」という主張は「反出生主義 (antinatalism)」と呼ばれている。D.Benatarは著書“*Better Never to Have Been*”等で分析哲学的な手法で反出生主義の正当化を試みている。

近年国内外でこのような問題について関心を持つ若手・中堅の研究者が増えているにも拘わらず、そのネットワークは十分に形成されていなかったため、問題意識や研究成果の共有が十分なされてこなかった。さらに、死や出生といった生命倫理的な問題との関連も十分に検討されてこなかった。本研究はこのような状況を打開することを意図したものであった。

## 2. 研究の目的

先に述べた「人生の意味」に関する諸学説の分類によって、「人生の意味」と幸福、価値、誕生、死、規範、自由意志、目的、時間といった概念との関連を論じることが容易になった。

本研究の第1の目的は、「生きるに値する生」の条件を整理して規範的な主張を明確にして、それを批判的に検討することであった。

本研究の第2の目的は、構築された「人生の意味」に関する規範的な議論を、生命倫理等の応用倫理学、特に終末期医療における倫理問題を検討することであった。

本研究の第3の目的は哲学史の中でこの問題がどう扱われてきたかを検討することであった。さらに本研究の最後の目的は、「分析実存主義」の可能性を検討することを通じて、分析哲学そのものの問い直しを行い、真理観や哲学的議論の手法を検討することであった。

## 3. 研究の方法

本研究では 研究分担者と研究協力者による研究会を開催して各自の研究成果を共有し、海外の研究者(T.Metz,D.Benatar)を招聘し、この2人の主張を批判的に検討するためのワーク

ショップと国際会議を開催した。さらに、そこで得られた議論の蓄積を医療倫理、特に終末期医療の問題に接続することを試みた。

本研究では、まず1年目に6名の研究分担者と1名の連携研究者、7名の研究協力者の間で研究成果を共有することで「人生の意味」に関する論点や対立点を可視化して、議論の構造の見取り図を描くことを試みた。その際に手がかりとしたのは、先に述べた主観説(人生の意味は心のうちにある)と客観説(人生の意味は心の外の効用などにあるとする)との区別、さらに Metz 自身が提唱する、人生の意味を社会への貢献や真善美への貢献にあるとする fundamentality theory である。本研究では Metz を2017年2月と2018年8月の二度招聘し、彼と直接議論する形で Metz の主張を批判的に検討した。

また2018年8月には Metz とともに Benatar を札幌に招聘し、彼を囲んだワークショップと国際会議を開催し、その主張を批判的に検討した。Benatar の議論は緻密だが問題点も多く、その議論構造の批判的検討を通じて、生の価値の構造をより明らかにすることができた。

#### 4. 研究成果

まず蔵田は「客観的な規範に従って生きることは(主観的な) 人生の意味 を奪うのか」という問題について検討し、「主観説」と「客観説」の区別を越えた視点の可能性を示した。

本研究の過程で研究分担者の森岡は J.Tartaglia による著作 *Nihilism and the Meaning of Life* を批判的に検討する書評論文集め、それをウェブ上で公開している(2017)。

また青土社刊行の雑誌『現代思想』の増刊号「分析哲学」(2017)では、研究分担者の村山が関連する研究動向についての詳細な紹介論文を発表し、さらに森岡は研究動向の紹介とともに「独在的存在者」の概念を提起し、「誕生肯定の哲学」を提唱する論文を掲載している。

さらに Metz の議論は、「人生の意味」に関する言明の真理性を前提し、「意味のある人生」の条件を明らかにするという形で進められている。しかしこのような問題設定そのものについて、メタ分析哲学的な観点から久木田と山口、村山が批判的に検討し、久木田は人生の意味に関する言説を表出主義的な観点から捉える必要性を示した。また「意味のある生を送るべし」という規範の含意についても久木田・村山・森岡・山口が批判的に検討した。

連携研究者(最終年度は研究協力者)である心理学者の浦田悠は Metz の主張を踏まえて「人生の意味」に関する実証的な研究からのフィードバックを行った。

メタ倫理学との関連では、この方面の代表的な文献である、ウィギンズの「真理、発明、人生の意味」という論文の翻訳を行った研究分担者の古田が、再度その検討を試みた。

また吉沢は「人生の意味」と死との間の関係を内的関係と外的関係に分類し、「死んでしまうのだから人生に意味はない」という命題の解釈について詳細な分析を行った。

死の形而上学を研究対象とする研究協力者の鈴木生郎は、「死の害」はいつ生じるのかという問題についての形而上学的な分析を通じて、分析実存主義の可能性について肯定的に評価した。

また研究協力者の山口は歴史哲学的な研究も踏まえて、「人生の意味」、特に人生の不条理さと自由意志の否定との関連を詳細に分析した(『現代思想』)。さらに山口は本研究班での議論をもとに一般向けの著書(山口尚『幸福と人生の意味の哲学』トランスビュー,2019)を刊行した。

また「人生の意味」に関する議論では、「生の目的」に関する議論を無視できないが、研究協力者の長門は論理実証主義者のシュリックらの議論を批判的に検討することを通じて、スーツらの「人生をゲームとして捉える」という視点を提示した。

さらに「人生の意味」に関する問いは、いわゆる why be moral?問題と結び付くことがあるが、研究協力者の杉本はこの問題についての功利主義的解答の不十分性を指摘した。

また森岡は客観説と主観説を批判する形で、フランクルの主張も踏まえて人生の意味の中核部分にある「独在的存在者」の概念を提起している。

さらに本研究では「人生の意味」に関する議論を哲学的文脈の中に位置づけた。蔵田は Parfit の“*On What matters*”を手がかりに、カント主義、功利主義、契約論の関連について検討し、カント主義の位置づけを再確認した。また研究協力者の山田はこの問題についての古典的な研究である W.James による論文の詳細な分析を行った。またストア主義を専門とする近藤は、「人生の意味」の問題についてストア主義的な幸福理解の観点から検討した。さらにウィトゲンシュタインの哲学、特に『論考』期の哲学の根底に「人生の意味」に関する問題があるが、この点については、ウィトゲンシュタインを専門とする古田が検討した。

生命倫理学との関連では、まず研究分担者の佐藤が「人生の意味」についてエンハンスメントとの関連で論じた。さらに蔵田は「人生の意味」というカテゴリーを終末期医療に適用する場合に、それが「意味のない生」という理解を生み出す可能性があることを指摘した。

本研究では全体として「分析実存主義」の可能性を認めながらも、その議論構成や前提される真理観の問題性が明らかになった。さらにこの種の議論が宗教的議論やスピリチュアリティとの接点ぬきに成立するののかという問題が残された。

なお、本助成事業によって 2018 年 8 月に開催した国際会議には、内外から 70 人が参加し、Metz と Benatar を含めて 38 人が発表した(うち 30 人が外国人で、参加者国籍は日本以外に 23 カ国)。上記の研究成果の一部は、この国際会議で発表されたものであり、関連業績を海外に向けて発信する準備も整っている。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(総件数 12 件)

蔵田 伸雄、客観的な規範に従って生きることは人生の意味を奪うのか、哲学年報(北海道哲学会)、査読無、2019、印刷中

森岡 正博、人称的世界はどのような構造をしているのか、現代生命哲学研究、査読無、第 7 号、2018、107-119

蔵田 伸雄、同じ山に異なる側から登る - パーフィットの定言命法理解をめぐって -、日本カント研究、査読無、第 18 号、2017、74-88

森岡 正博、「人生の意味」の哲学」、現代思想、査読無、12 月臨時増刊号総特集「分析哲学」45 巻 21 号、2017、180-185

村山 達也、人生の意味の分析哲学、現代思想、査読無、12 月臨時増刊号総特集「分析哲学」45 巻 21 号、2017、266-282

古田 徹也、現代の英米圏の倫理学における運の問題、社会と倫理、査読無、32 号、2017、3-14

森岡 正博、フランクル『夜と霧』における人生の意味のコペルニクス的転回について、The Review of Life Studies、査読無、7 巻、2016、1-19

〔学会発表〕(総件数 25 件)

Masahiro Morioka, A Solipsistic and Affirmative Approach to Meaning in Life, First International Conference on Philosophy and Meaning in Life, 2018

Tatsuya Murayama, Translating the "Meaning" of "Life", International Symposium 'Translation of Knowledge and its Methods', 2018

古田 徹也、分析系の人生の意味論とウィトゲンシュタイン、哲学会第 57 回研究発表大会、

2018

村山 達也、人生の意味への問いは何を問うているのか、日本倫理学会第 68 回大会、2017  
蔵田 伸雄、客観的な規範に従うことは人生の意味を奪うのか、北海道大学哲学会・北海道  
哲学会合同シンポジウム「人生の意味」、2017

蔵田 伸雄、主観説と客観説の区別を越えて、日本倫理学会第 68 回大会、2017

蔵田 伸雄、「人生の意味」というカテゴリーを生命倫理領域で用いる場合に注意しなければ  
ならないこと、日本生命倫理学会第 29 回年次大会、2017

久木田 水生、人生の意味についての言説はどのような言語ゲームなのか、第 50 回科学哲  
学会ワークショップ、2017

蔵田 伸雄、同じ山に異なる側から登る - 定言命法の理解をめぐって、日本カント協会第  
41 回大会、2016、

古田 徹也、現代の英米圏の倫理学における運の問題、日本倫理学会第 67 回大会、2016

近藤 智彦、運と幸福 ストア派・アンティオコス・キケロ、日本倫理学会第 67 回大会、  
2016

〔図書〕(計 1 件)

Masahiro Morioka (ed), Journal of Philosophy of Life, Nihilism and the Meaning of  
Life: A Philosophical Dialogue with James Tartaglia, 2017, 総 315 ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)      取得状況(計 0 件)

〔その他〕

## 6 . 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：古田 徹也

ローマ字氏名：Tetsuya Furuta

所属研究機関名：専修大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 00710394

研究分担者氏名：久木田 水生

ローマ字氏名：Minao Kukita

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：情報学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10648869

研究分担者氏名：近藤 智彦

ローマ字氏名：Tomohiko Kondou

所属研究機関名：北海道大学

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30422380

研究分担者氏名: 村山 達也

ローマ字氏名: Tatsuya Murayama

所属研究機関名: 東北大学

部局名: 文学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 50596161

研究分担者氏名: 佐藤 岳詩

ローマ字氏名: Takeshi Sato

所属研究機関名: 熊本大学

部局名: 大学院人文社会科学研究部(文)

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60734019

研究分担者氏名: 森岡 正博

ローマ字氏名: Masahiro Morioka

所属研究機関名: 早稲田大学

部局名: 人間科学学術院

職名: 教授

研究者番号(8桁): 80192780

## (2)研究協力者

研究協力者氏名: 浦田 悠

ローマ字氏名: You Urata

研究協力者氏名: 北村 直彰

ローマ字氏名: Naoaki Kitamura

研究協力者氏名: 杉本 俊介

ローマ字氏名: Shunsuke Sugimoto

研究協力者氏名: 鈴木 生郎

ローマ字氏名: Ikurou Suzuki

研究協力者氏名: 長門 裕介

ローマ字氏名: Yusuke Nagato

研究協力者氏名: 山口 尚

ローマ字氏名: Syou Yamaguchi

研究協力者氏名: 山田 健二

ローマ字氏名: Kenji Yamada

研究協力者氏名: 吉沢 文武

ローマ字氏名: Fumitake Yoshizawa

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。